聖霊降臨後第5主日（特定7）　マルコ4章35―41節

［直訳］

35 そして　彼は言う　彼らに　その日に　夕方になって
「私たちは渡ろう　向こう岸のほうへ」。
36 そして　残して　群衆を
彼らは連れて行った　彼を、　彼がいたように、舟の中に、
そして　他の舟が　いた　彼と共に。

37 そして　生じる　風の大きな突風が　　a
そして　波が　襲いかかっていた　舟の中へ、
その結果　舟がすでに満たされることが。

38 そして　彼は　いた　艫の中に　枕の上に　眠りつつ。　　b
そして　彼らは起こす　彼を
そして　彼らは言う　彼に、
「先生、あなたに気にならないのか　次のことが　　c
私たちが滅びる」

39 そして　目覚めて
彼は叱った　風を　　b’
そして　彼は言った　海に、
「黙れ、静められよ」

そして　なえた　風が　　a’
そして　生じた　大きな静けさが。

40 そして　彼は言った　彼らに、
「なぜ　臆病で　あなたたちはあるのか
まだあなたたちは持たないのか　信仰を」
41 そして　彼らは恐れた　大きな恐れを
そして　彼らは言っていた　互いに、
「だとすると　誰でこの人はあるのか
なぜなら　風さえも　海さえも　従う　彼に」。

［新共同訳］

35 その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。36 そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。37 激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。38 しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。39 イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。40 イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」41 弟子たちは非常に恐れて、「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った。

①文脈

ⓐ 4 章 35 節から 8 章 26 節では、五千人の供食や海上歩行をはじめとする一連の奇跡物語が語られているが、注目されるのは、これらの奇跡物語がしめくくられる 8 章 29 節では、「あなたはメシアです」とのペトロの信仰告白が述べられることである。4 章 35 節から 8 章 26 節の一連の奇跡は、このペトロの信仰告白を導き出すための出来事だとも言える。

ⓑこのような文脈から 4 章 35―41 節を見る時、41 節の「いったい、この方はどなたなのだろう」という問いは非常に大きな意味を持ってくる。この「イエスは誰なのか」という主題は、形を変えて、5 章 7 節、6 章 3 節、14―16 節、8 章 27 節以下で取り上げられ、8 章 29 節のペトロの信仰告白において一つの結論に至る。しかし、さらに広くマルコ福音書全体の文脈から見るならば、この問いは、十字架上の死後、「本当に、この人は神の子だった」との百人隊長の告白（一五 39）へとつながってゆく重大な問いである。

②構成

ⓐ 35―36 節

㋐ 35 節の「その日」とは、湖畔にいる群衆に舟から教えを説いた日のことである（四 1）。36 節二行目の「彼がいたように」は、この 4 章 1 節のイエスの状態を指しているから、二行目全体は「前に舟の中にいたが、そのように舟の中のイエスを彼らは連れて行った」の意味である。このように「舟の中」が強調されているのは、この「舟」に特別な意味合いを込めたいからだろう。

ⓑ 37―39 節

㋐ 37 節（a）と 39 節後半（a’）が「生じる」と「大きな」によって対応している。「風の大きな突風が生じた」が、イエスが叱ることによって、「大きな静けさが生じた」。

㋑ 38 節一行目（b）と 39 節前半（b’）とは、イエスの行動を述べている。突風の中でも「眠っていた」イエスは、弟子に起こされると、風を「叱った」。38 節二―五行目（c）では「私たちは滅びる」と言って狼狽する弟子たちの姿が描かれる。b と b’ に包んで c を述べることによって、イエスと弟子の態度の違いが浮き彫りにされる。

ⓒ 40―41 節

㋐ 40 節の「臆病」は新約聖書で 3 回使われるが、いずれも不信仰を表している。「まだ持たない

のか」とあるから、弟子たちは持つべき信仰を欠いた状態にある。41節の「言っていた」は動作の開始と継続を表す未完了過去形である。

③嵐の中で示される弟子とイエスの姿勢の違い

ⓐ湖を渡る舟（35―36節）

㋐夕方、イエスと弟子たちは舟で向こう岸に漕ぎ出す。この舟は4章1節以下で、イエスが座って教えを説いた舟であり、いわば説教台の役割を果たした舟である。マルコは36節で「イエスを舟に乗せたまま」と書き、この舟に注目させている。この舟は湖を渡る移動手段であるだけでなく、この世を渡る教会を表す象徴でもある。教会の歩みは、湖を向こう岸へと漕ぎ出す船路のように、途中で嵐に遭遇するかもしれない。しかし、イエスは神への信頼に基づいて、「私たちは渡ろう」と弟子たちに呼びかける。弟子たちがこの呼びかけに従って神に信頼するなら、恐れは生じない。

㋑「舟」と訳されるプロイオンは、どんな船にも使われるが、特に商船を表す語である。新約聖書では、まず海上を航行する大型の「船」を表す。使徒言行録の19回の用例はいずれもこの意味である。それはパウロが宣教旅行のために用いた船であり（二〇13など）、囚人としてカイサリアからローマに護送されたときの船でもある（二七2など）。福音書での用例ではすべて「小舟」、特にガリラヤ湖上の小さな漁船を表す。「舟」で網の手入れをしていたゼベタイの子ヤコブとヨハネは、イエスに呼ばれると、「舟」を残してイエスに従う（マコ一18・19と並行箇所）。ここでの舟は彼らの古い生き方の象徴であろう。

㋒ガリラヤ地方を宣教するイエスや弟子にとって、舟は欠かせない移動手段である（マコ四36、五2・18・21、六45など）。しかも単なる移動手段では終らず、湖畔の群衆に教えるイエスが腰を下ろす場所であり（マコ四1、マタ一三2）、弟子がイエスのしるしを体験する舞台でもある（マコ六47と並行箇所、ヨハ二一3・6）。

㋓36節では、ガリラヤ湖を渡ろうとするイエスと弟子たちが乗る舟であり、弟子はこの舟の中で突風を静めるイエスを目にしている。この舟は、36節に「そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した」とあるように、岸辺にいる群衆にたとえを教えたイエスが乗っていた舟であり（四1）、ガリラヤ湖東岸の「ゲラサ人の地方」に進んでいく舟である（五1）。ここでの舟は単なる移動手段を超えた意味を持っているだろう。つまり、群衆に教えを説く説教台であり、世に宣教し、世を渡って行く教会を表す象徴となっている。

㋔マルコは37節で、激しい突風のために舟が波をかぶり水浸しになるほどだった、と書いているが、これは世の荒波をかぶる教会の象徴であろう。イエスは風を叱り、波をおさめることによって、世にある教会が信頼すべき方が誰であるかを示している。

ⓑ突風を静める（37―39節）

㋐そこへ突風が生じ、波が襲いかかる。それにも関わらずイエスは枕をして眠っている。「眠っていた」は、動作の継続を表す言い回しで、イエスの信頼しきっている態度が強調されている。神に信頼を置くイエスは、嵐の時も平安の内にある。

㋑これに対して、弟子たちは狼狽して、イエスに「私たちが滅びることが気にならないのか」と訴える。この「私たち」はイエスをも含むなら、「あなたも含めて私たちが皆、滅びようとし

ているのに、あなたは気にならないのか」の意味になる。同じ「私たち」というグループの中にいることがかえって、神にすべてをゆだねて眠るイエスと、神に信頼しきれずに狼狽する弟子たちとの対比を浮き彫りにする。

㋒そこでイエスは目覚めて風に命じる。「静められよ」と訳された語は「発言できないように口輪をはめる」を意味する語である。風はイエスの命令通り、黙って静かになる。旧約聖書によれば、海に境界を設け（創一 2、 9―10）、荒れ狂う水を治める（詩一〇七 29―30）ことができるのは神だけであるが、イエスを通してその神の力が働く。波風は力を失い、「大きな静けさ」が生じた。平安と権威に満ちたイエスの姿が b と b’に描かれる。

㋓このようなイエスの行動の背後には神への信頼がある。イエスは神に信頼しているから、水浸しになった舟の中でも眠っており、風を叱って静めることができる。狼狽する弟子たちの姿（c）を信頼するイエスの姿（b と b’）で挟み込むことによって、イエスのゆだねきった姿が強調されると共に、弟子たちの狼狽が神にゆだねきれない臆病さから生じていることが示される。

Ⓒ弟子たちの問い（40―41 節）

㋐イエスは弟子たちに、なぜ「臆病」なのか、「信仰を持たない」のかと叱るが、これはイエスと弟子の違いが何に由来するのかを明らかにする。弟子たちの狼狽は神に委ねきれない臆病さから生じ、イエスの静けさと権威は、神に信頼する信仰に根ざしている。神への信頼の有無が両者の違いを生み出している。だから、荒れ狂う波を静めたのはイエス自身であるというより、むしろイエスの信頼に応えて働く神である。イエスは「なぜ臆病なのか、信仰を持たないのか」と叱ることによって、彼が身をもって示した神への信頼を呼びかけている。

㋑このしるしに対する弟子たちの反応が「大きな恐れを恐れた」と書かれている。荒れ狂う波風を一言で静めたイエスを前にした弟子たちは「恐れ」に捕らわれる。この「恐れ」が弟子たちの歩みの出発点となる。静まり返った湖のただ中で、イエスを通して働く神の力を目の当たりにして弟子たちは「恐れ」を覚えた。彼らはこの恐れを抱えつつ、「いったい、この方はどなたなのだろう」と問う。

㋒41 節「だとすると、この人は誰であるか、と互いに言っていた」とあるが、この「言っていた」は動作の開始と継続を表す未完了過去形である。弟子たちは恐れを抱えつつ、イエスは誰なのかと問い始める。これはイエスの本質に関わる重大な問いである。弟子たちが抱いた「恐れ」は、問い続けることによって真の「畏れ」へと変わるべき恐れである。

④しるしを心に留めて、問い続ける

ⓐ奇跡はイエスがメシアであることの証明ではない。証明ならば、もはや問う必要はなくなるはずだからである。むしろイエスを通して引き起こされる奇跡は、イエスが誰なのか、という問いを引き起こす。奇跡は、イエスが誰であるかを指し示す「しるし」である。弟子たちはこのしるしを心に留めて、「向こう岸に渡ろう」と言われるイエスに従い、イエスが信頼する方への信仰を見習っていく。

ⓑ荒れ狂う波風を静めたのは、イエスの信頼に答えて働く神である。嵐は恐れるべきものではなく、その嵐を静める方をこそ真に畏れるべきである。弟子とは、「恐れ」と「畏れ」のはざまにあって、「だとすると、この人は誰であるか」と問い続ける人である。